

プロローグ

この本は、私の母と私自身のことを語るものです。ということは、必然的に祖母と父の話も出てきます。私たちの物語はドラマチックなものであると思います。ひとつには、この本が最近一二〇年ほどの中国で起こったことを書いたもので、国が何度もひっくり返るほどの動乱の時代の物語だからです。けれども、同じように重要なのは、私の両親と祖母が時代の波にあらがって泳いだ特別な人たちであり、そのことによってさらに大きな波に巻き込まれた人たちだったということです。そんな家庭に生まれた私自身も、波瀾万丈の人生を送ることになりました。

何年も前に、私は祖母と母と私自身のことを『ワイルド・スワン』という本に書きました。物語は中国が最後の皇帝によって治められていた一九〇九年当時の祖母の誕生——と幼少期の纏足——の話から始まり、毛沢東の統治（一九四九年〜七六年）を描きます。とりわけ、毛沢東統治の最後の一〇年間は恐ろしい文化大革命の時代で、私の両親は多大な苦難を味わいました。毛沢東主義の時代は、鄧小平が「改革」を開始した一九七八年に正式に終了しました。そんな絶好のタイミングで、私は共産党の支配する中国を離れて西側へ留学した初めての中国人の一人となりました。

一九七八年は重大な転機となりました。それから半世紀を経ようとしている現在、中国は惨めな孤立した国家から変貌を遂げて大国となり、アメリカと世界一の地位を争うまでになりました。そのあいだ、私はロンドンに住んでいましたが、私の人生は母国である中国とも深く絡みあってきました。母は中国に住んでいますし、私もほぼ毎年のように中国に帰国して母を訪ねていました。ただ、最近では政治的事情から私は母を訪ねることができなくなっています。私は本を書くために中国各地を飛び回りました。『ワイルド・スワン』。毛沢東の伝記（夫のジョン・ハリデイとの共著）。古い中国を近代国家に変貌させた最後の偉大なる帝国支配者西太后（一八三五年〜一九〇八年）の伝記。本を書くための調査や取材は、大半が私の本が発行禁止にされていた時期（現在も）におこなわれました。こうした日々の中国当局とのやりとりは、濃密で多くのことを示唆するものでした。中国は、いま、またもや重大な転機を迎えようとしています。習近平主席は毛沢東を崇拜し、資本主義の顔をした毛沢東主義の国家を建設しようとしているのです。新しい習近平時代は、母と私の人生に重大な影響を及ぼしています。私は『ワイルド・スワン』の続きを書くべきときが来たと感じました。『ワイルド・スワン』が終わったところからふたたび筆をとり、私の家族——ならびに中国——の物語を新たに語ろうと思います。

私の父と祖母は、ともに文化大革命のあいだに悲劇的な死を遂げました。『ワイルド・スワン』に書いたとおりです。父と祖母は、ずっと私の頭の中に記憶として生きつづけ、したがって、この本にも何度か登場することになります。実際、過去はその後の私の人生において、けっして遠い記

憶ではないのです。過去は今日の私を形づくり、現代の中国を形成し、さらに言うならば、未来を予告するものです。

この本を『翔べ、ワイルド・スワン (Fly, Wild Swans)』というタイトルにしたのは、母にこの本を捧げるつもりだからです。死の近い母の枕辺に、私は訪ねていくことができません。私が自由に羽ばたけるよう翼を与えてくれたのは、母です。今日、私が自由に生き、自由に書くことができるのは、母のおかげです。母への感謝の思いは言葉に尽くせません。